

令和6年東京都輸血状況調査集計結果（概要）

1 調査対象・回答率

(1) 目的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

(2) 対象

都内にある病床数 20 床以上の医療機関：633 箇所、令和 6 年 1 月～12 月を調査対象期間とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、電子メールのいずれかとした。

※令和 5 年調査より、精神科・神経科・心療内科単科医療機関も対象とした。

(3) 結果

518 機関（回答率 81.8%）（前年：635 機関中 548 機関 同 86.3%）から回答が得られ、うち一般病床 100 床以上の機関は 196 機関（同 91.2%）であった。

得られた回答は「令和 6 年輸血状況調査集計結果（概要）」としてまとめるとともに、100 床以上の 196 機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

(4) 報告

「令和 6 年輸血状況調査集計結果（概要）」「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100 床以上の 196 機関については、「令和 6 年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」（個票）を作成し送付する。

2 集計結果の概要（項目別）

(1) 輸血療法委員会の設置状況

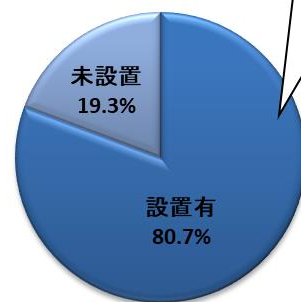
委員会を設置している医療機関は、418 機関（80.7%）であった。
（前年 429 機関 78.3%）

一般病床 100 床以上の 196 機関でみると、委員会設置は 186 機関（94.9%）であった。（前年 193 機関 96.0%）

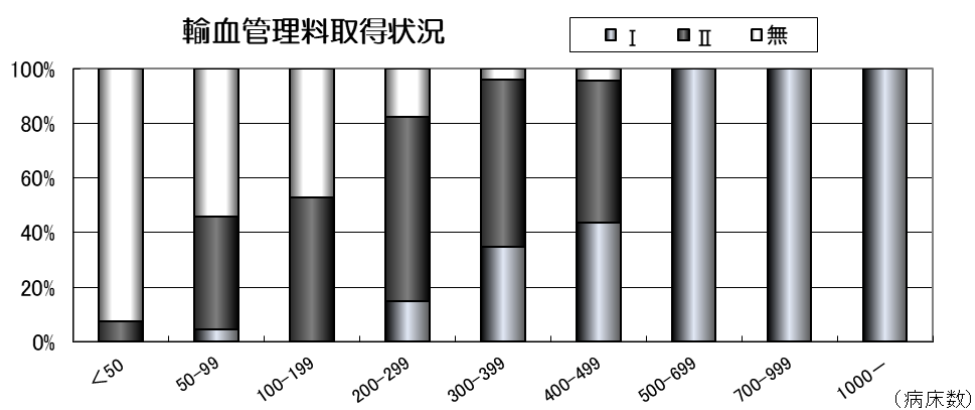
(2) 輸血管理料（Ⅰ・Ⅱ）の取得状況

取得機関は 215 機関（41.5%）で、内訳はⅠ：59 機関、Ⅱ：156 機関であった。（前年 219 機関 40.0% Ⅰ：62 機関、Ⅱ：157 機関）

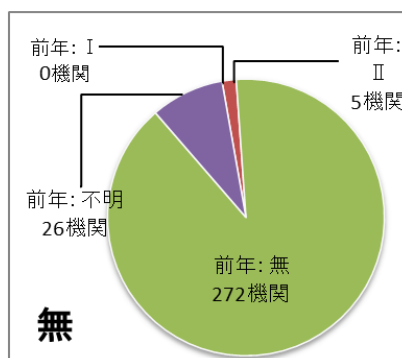
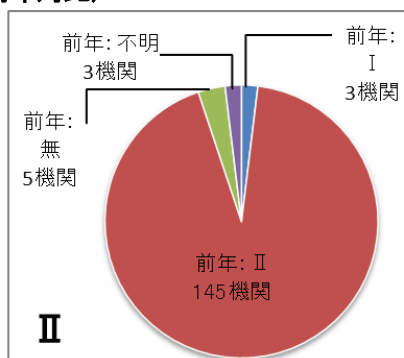
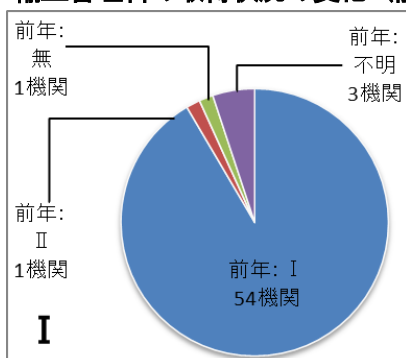
委員会設置



輸血管理料取得状況



輸血管理料の取得状況の変化（前年対比）



(3) 院内採血の状況

院内採血はなく、前年と同様である。

(4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア 赤血球製剤の使用量は 654,551U で、前年 683,713U より減少した。

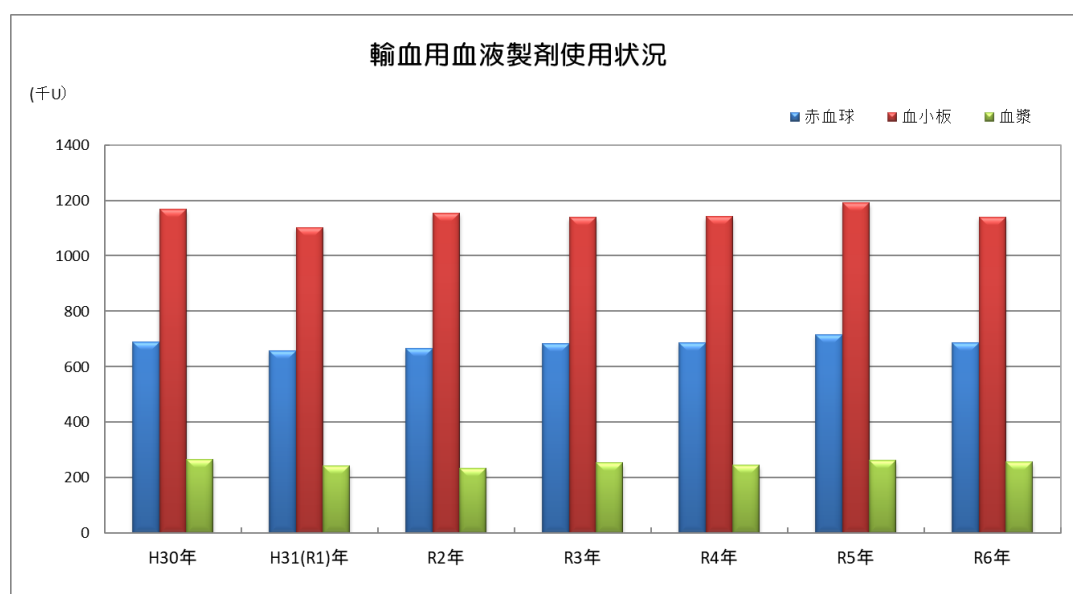
イ 血小板製剤の使用量は 1,140,401U で、前年 1,190,100U より減少した。

ウ 血漿製剤の使用量は 256,744U で、前年 261,683U とほぼ横ばいである。

エ 全血製剤（日赤製）の使用はなく、前年と同様である。

オ 白血球濃厚液の使用は 5 機関あり、使用対象は顆粒球輸血（5 人）、ドナーリンパ球輸注（21 人）であった。

カ 同種クリオプレシピテート作製本数は、新鮮凍結血漿（FFP）LR240 から 16 本（2 機関）、LR480 から 1,174 本（11 機関）であった。



(5) GVHD予防のための放射線照射血液の使用状況

輸血用血液製剤使用病院 390 機関中の全てが照射血を使用しており、前年の 100%と同様である。

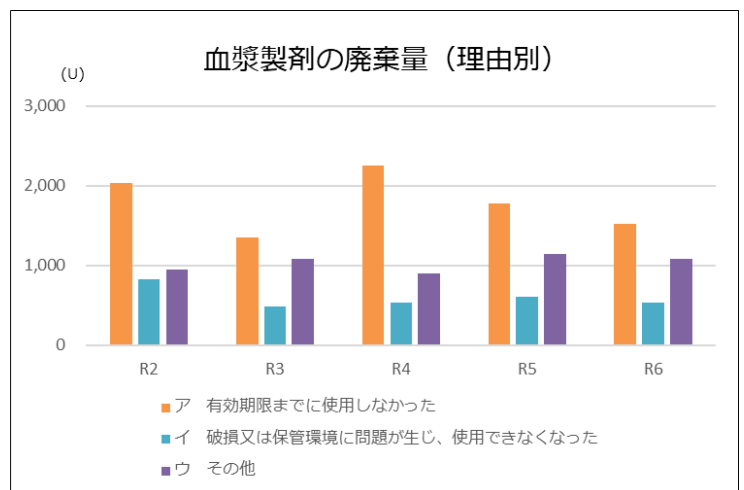
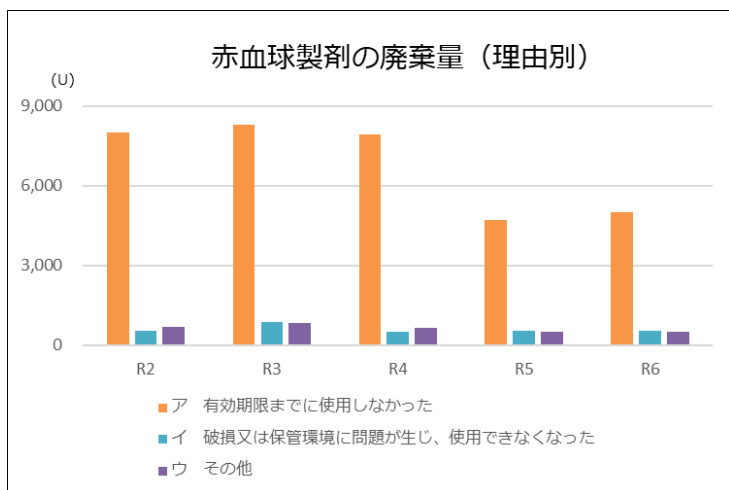
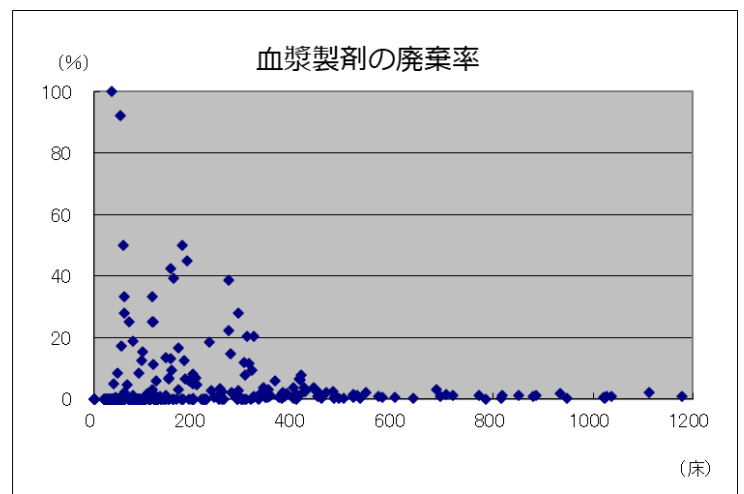
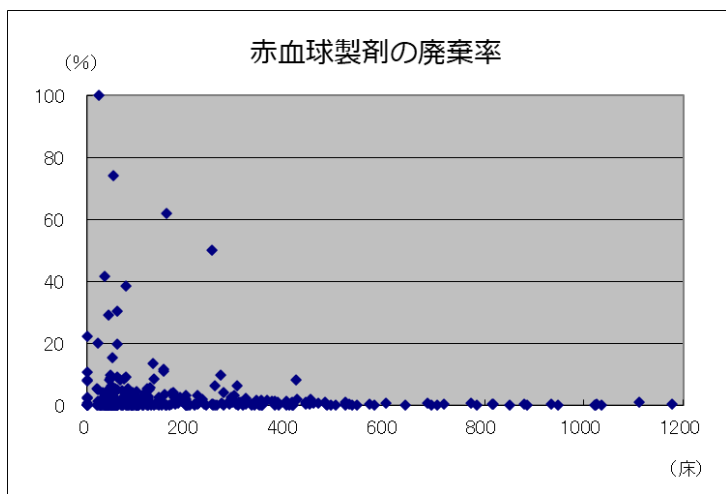
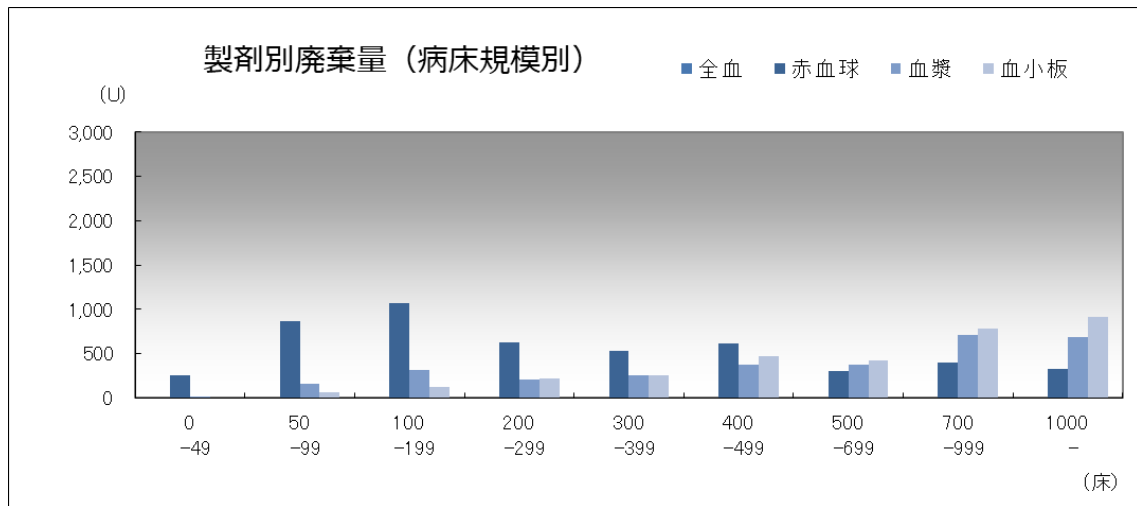
(6) 製剤別購入・廃棄量の状況

ア 全血製剤は、前年と同様、購入・廃棄ともなかった。

イ 赤血球製剤の廃棄率は 0.8%(5,001U) で、前年 0.8%(5,734.5U) と横ばいである。

ウ 血小板製剤の廃棄率は 0.3%(3,262U) で、前年 0.3%(3,222U) と横ばいである。

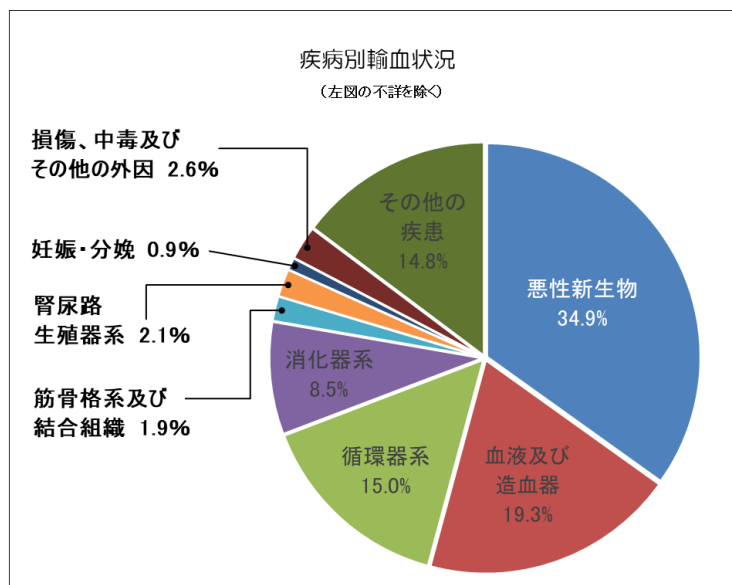
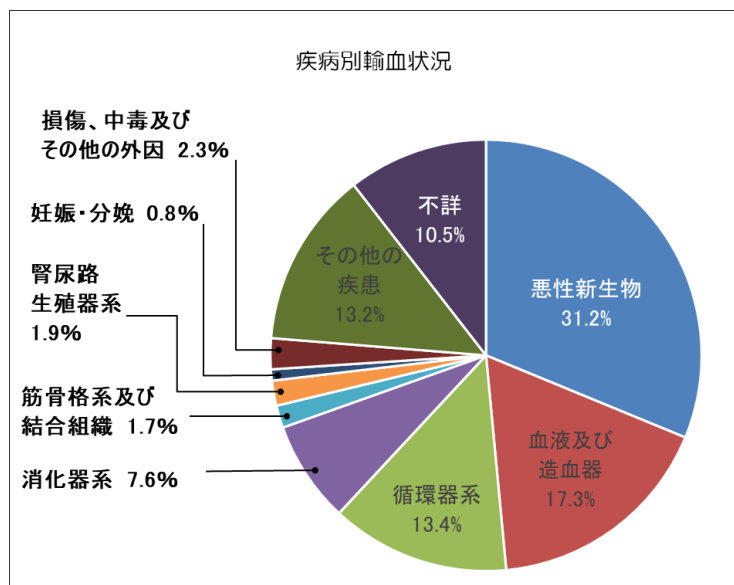
エ 血漿製剤の廃棄率は 1.2%(3,135U) で、前年 1.3%(3,529U) より減少した。



(7) 疾病別及び年代別輸血状況

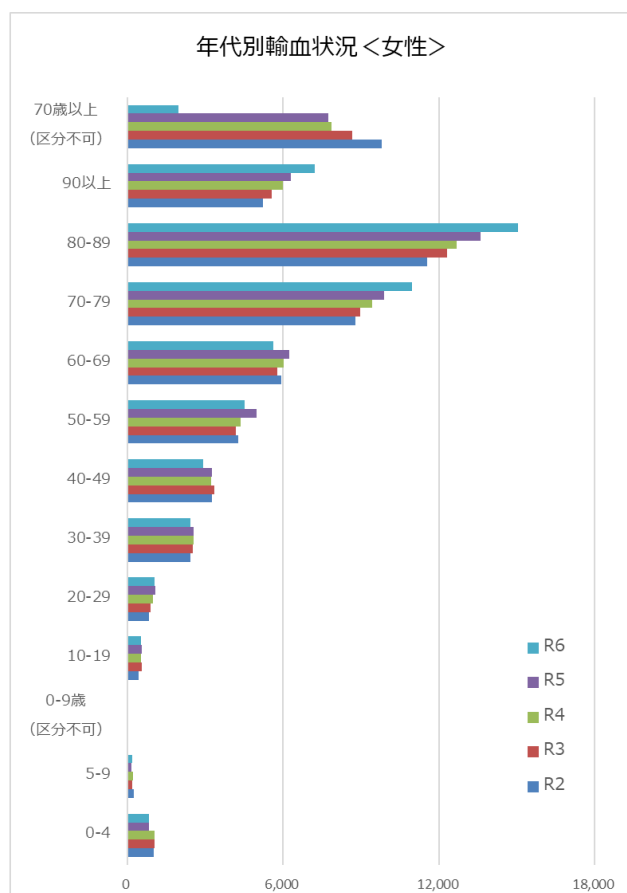
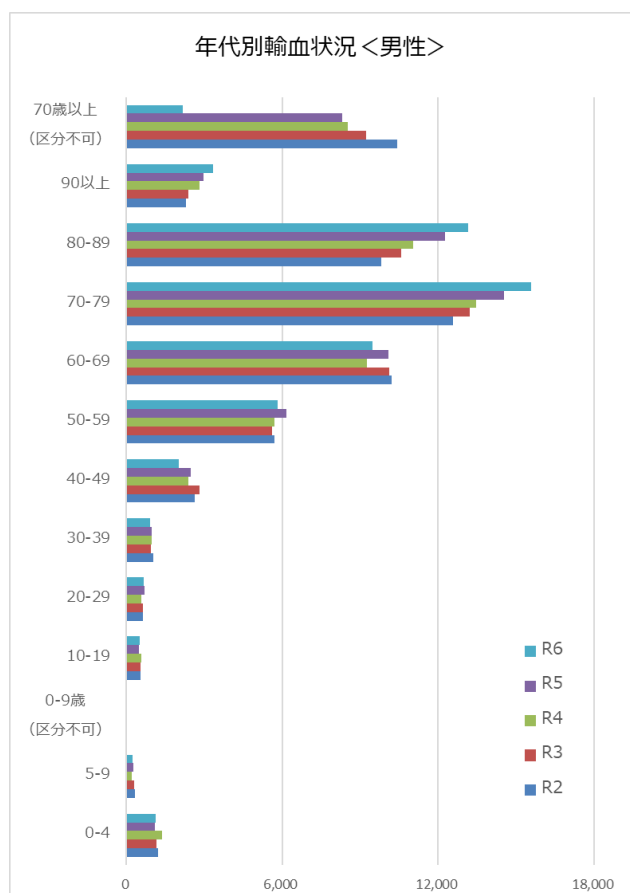
・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の34.9%が使用されており、前年（33.2%）とほぼ同様である。

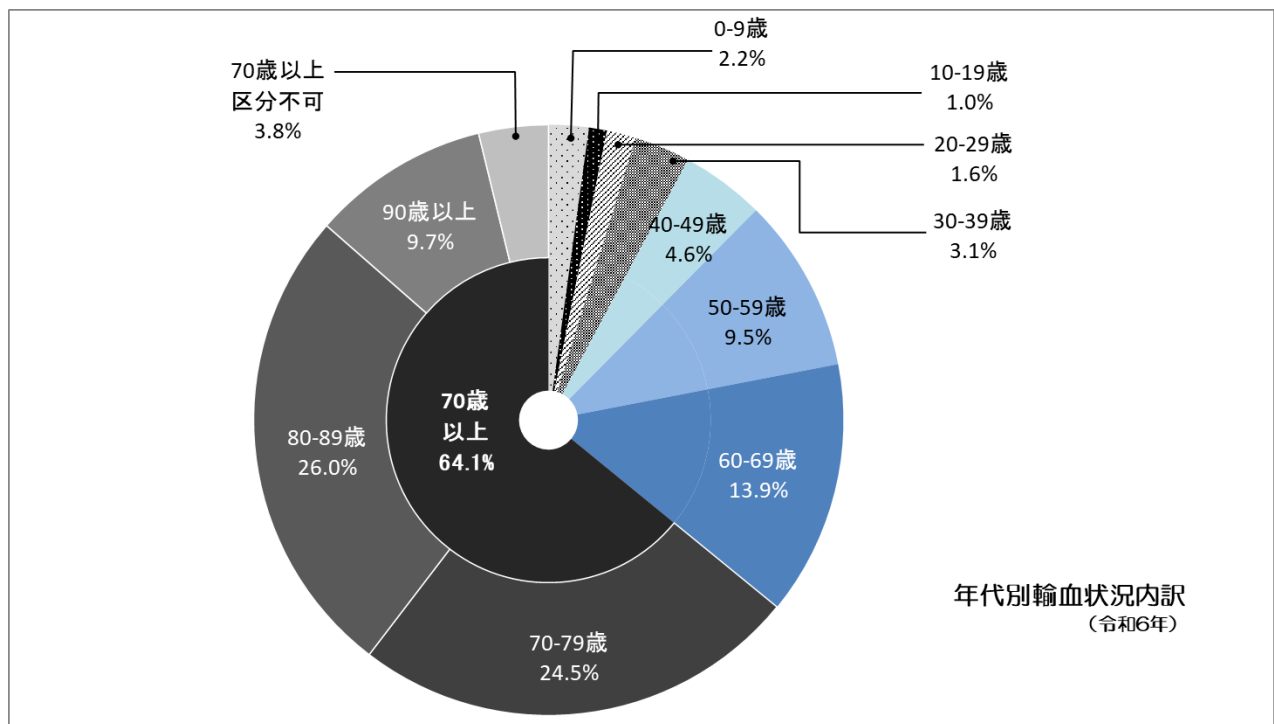
※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。



・年代別では、50歳以上の患者への使用が全体人数の87.6%、60歳以上 78.0%、70歳以上 64.1%で、いずれの区分でも前年（50歳以上 87.7%、60歳以上 78.2%、70歳以上 64.3%）とほぼ同様である。

※同一人について:30日間の複数回使用は1人としてカウント。70歳以上で10歳ごとに区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。

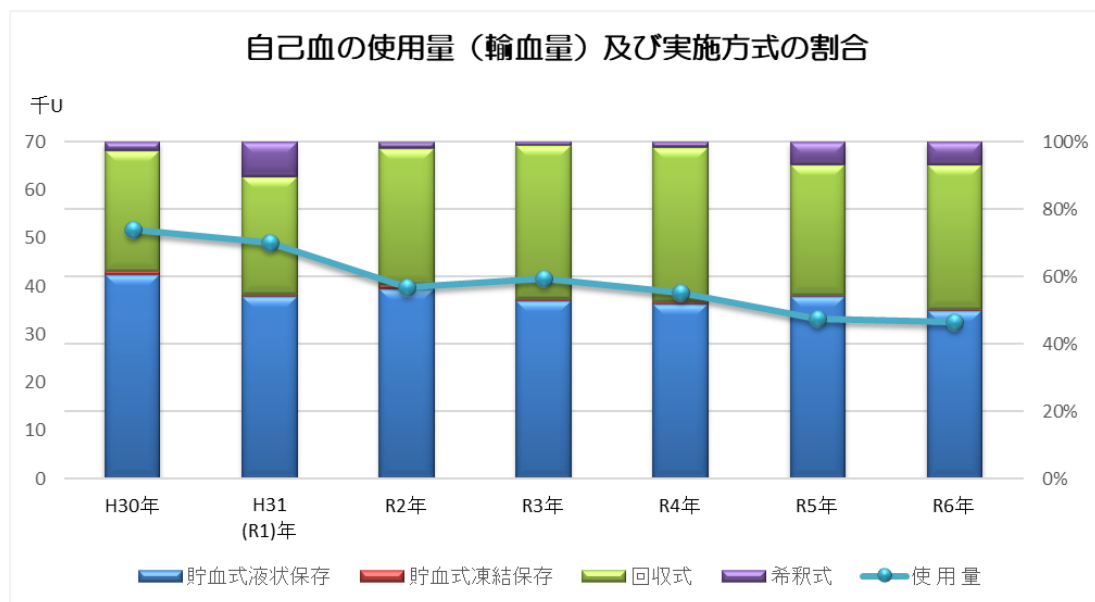




※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

(8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は32,458.3Uで、前年(33,248.0U)より減少した。

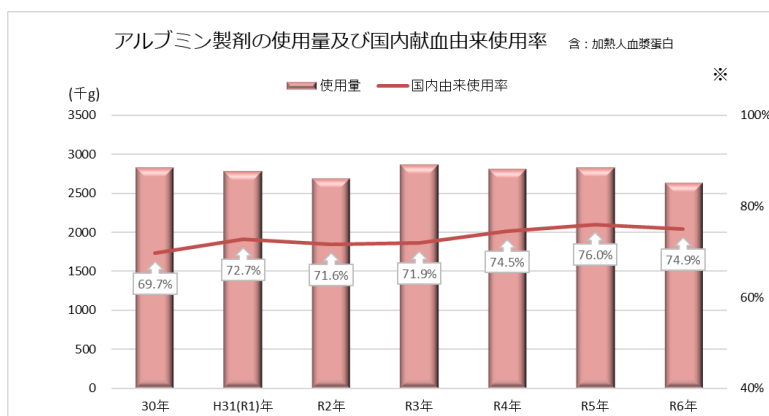
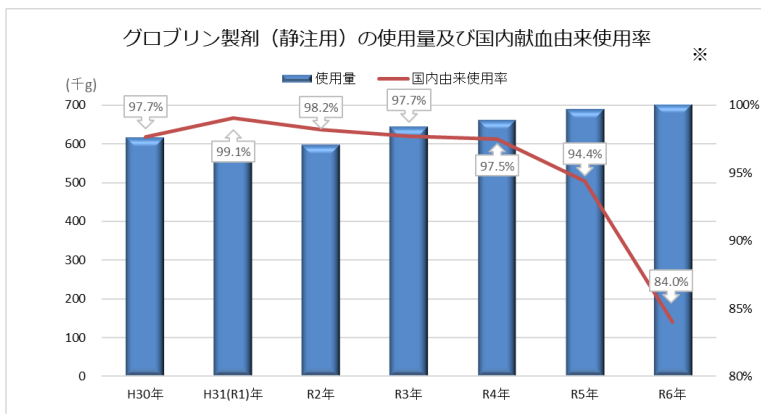
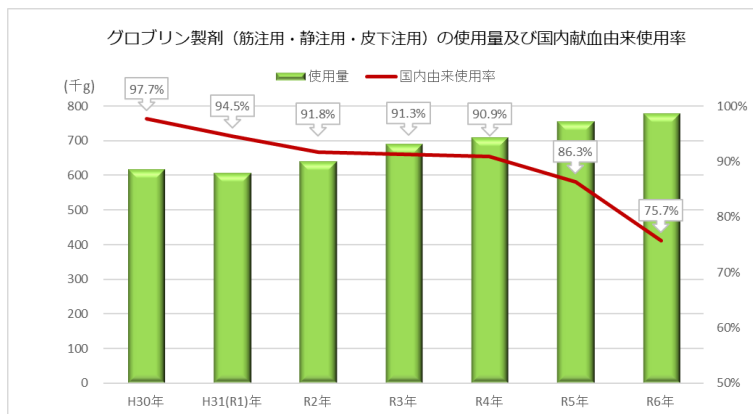


(9) 血漿分画製剤の使用状況

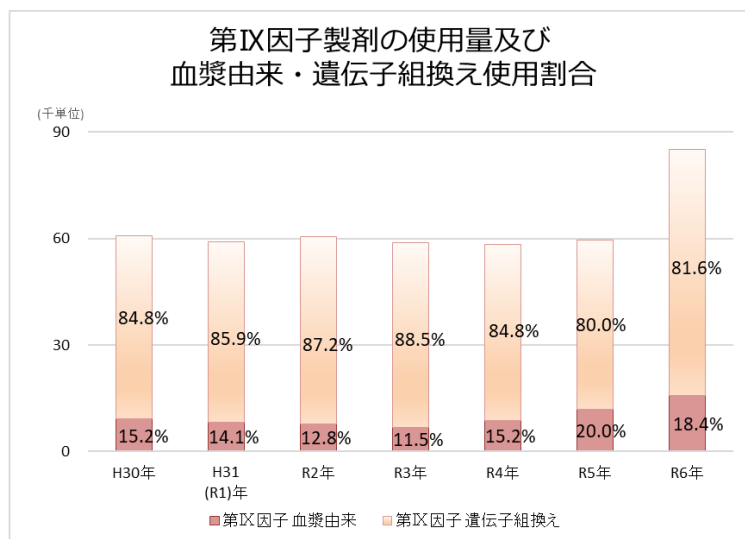
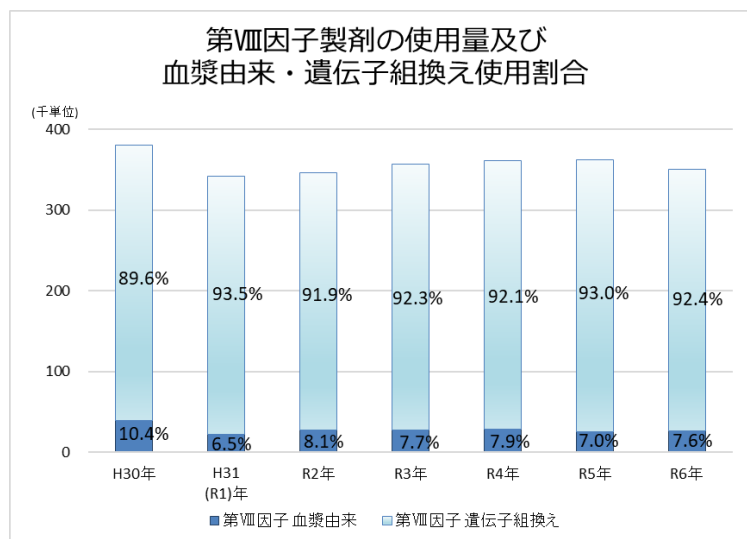
血漿分画製剤（組織接着剤を含まない。）の使用量は464,001本で、前年（483,365本）より減少した。グロブリン製剤全体（特殊グロブリンを除く。）の使用量における国内献血由来使用率の割合は75.7%（590,730.0g）で、前年86.3%（652,379.5g）より国内自給率は減少した。

グロブリン製剤（静注用）の使用量における国内献血由来製剤の割合は84.0%（590,729.5g）で、前年94.4%（652,379.0g）より国内自給率は減少した。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む。）の使用量における国内献血由来製剤の割合は、74.9%（1,970,637.8g）で、前年76.0%（2,146,409.3g）より国内自給率は減少した。



※平成30年から「静注用 規格20g」（国内外由来あり）を追加、令和元年（平成31年）から「皮下注用 規格1g・2g・4g」（全て国外由来）を追加。
※令和5年から国内献血由来使用率の算出方法を、使用本数による算出から使用量による算出に変更した。



※機能代替製剤、複合体製剤は除く。1単位＝250IU